ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　――数日後。

　あの異質な男が登った山の入口の数千メートル手前に、巨大な道場がある。古ぼけた看板には、『辰巳』と書かれていた。看板もさることながら、外観も中々に昔ながらの『道場』といった感じだ。入口を塞ぐ大きな木の門や、道場を囲む木板は、ところどころ傷んで、覗けば中が見える程度の小さな穴があいている。道場破りの一人でもくれば、こんな門や板は、あっという間に壊されてしまうだろう。

　それでもまだ、こうして残っているのは、単にここの道場の師範の、その恐るべき強さで守られている所以である。今日も、まだお天道様が真上に来るちょっと前の時間帯、数は少ないが、幼い子供達の元気な声が、道場の外に響いていた。

　その中でも、この道場の中心にある格技場から、一際元気な叫び声が聞こえてきた。

　これは、その男の子の物語。

「いっけぇーっ！」

　ややウェーブのかかった黒髪の小さな男の子が、額に汗の玉を浮かべ、自分のパートナーに声援を贈っている。大きく、そして純粋なその黒い目は、ただ一点、相手のポケモンの赤い体を見据えていた。

　彼のパートナーである、小さな黄色い電気鼠が、その六倍はあろうかという身長をほこる、相手のシャープで赤いポケモンに、果敢に突っ込んでいく。時折振り下ろされる、目玉模様のついたを左右にしつつ、懐に飛び込んで、バチバチと音を鳴らしている自身の拳を、その細い体に叩きつける。

　だが、赤いポケモン、ハッサムには、さして効いている様子もないのか、蹌踉めくことすら無かった。

「ピチュー、ボルテッカー！」

　それでも怯むことなく、小さな男の子、『』は、自分のパートナーであるピチューが地面に着地した瞬間、次の指示を出す。たちまち、ピチューの体が電流を纏い、直径四十センチはあろうかというほどの電気の玉へと姿を変える。

　だが、それを見て、ハッサムのトレーナー兼ここの師範である『田島辰巳』は、はぁ、という深い溜息を漏らした。

　その溜息は、何の策もなくハッサムに突っ込むピチューに対しても勿論のこと、その指示を出した雅也に対しても向けられたものだ。ハッサムは慣れた動作で、タイミングよく突っ込んできたピチューを鋏のひと振りで吹っ飛ばす。吹っ飛ばされたピチューは、壁に激突し、目を回しながらポテンと地面に落っこちた。

　もしここに審判がいれば、「ピチュー、気絶！　よってこのバトルの勝者、田島辰巳！」という声が聞こえてくるのだが、残念ながら、この場に審判はいない。一般的な学校の体育館の四分の三ほどもある広さの格技場には、文字通り二人のトレーナーと、二匹のポケモンしかいない。壁になにか掛かってるわけでも、なにか置物があるわけでもないのである。

「修行が足りんな。無闇に突っ込みすぎだ」

　田島辰巳は、嘆くようにそう言った。この注意は、今年……いや、雅也がポケモンバトルの修行を始めた時からずっとしていることだ。

　壁に激突し、気絶したパートナーを起こしながら、雅也はプクゥっと頬を膨らませる。

「だって、勝てそうだったし……」

「どこをどう見たらそう思ったんだ？　やれやれ……お前はもうちょっと、守りを覚えなさい。近くにいい手本がいるだろうに」

　だが、その手本は、逆に余りにも守りすぎで、その子には雅也を手本にしろと言っているのだが、どうも二人は自分のバトルスタイルを崩すつもりはないらしい。この道場にはもう一人彼の弟子がいるが、その子はその子で、テクニック重視の絡めてしか使わず、他が疎かだ。いっそ、三人のバトルスタイルを足して三で割ればちょうどいいのにと、今年で四十になる田島はこのところ、毎日同じようなことを感じられずにはいられない。

　田島が溜息を吐きそうになった、その時だ。

「ご飯できたよー」

　その問題の『守り重視』の弟子の、どこか遠慮したような声が入口から聞こえてきた。そっちを見ると、本人がそこにいる。

　顔つきはよく見ると雅也に似ているが、まだ小学一年生にも関わらず銀縁の眼鏡をかけているせいで、見分けるのには誰も苦労しない。髪の色も、雅也と比べれば、ちょっと茶色がかかっているし、髪の毛自体もウェーブもかかってなく、ストレートになっている。その男の子の名前は『』。社会的にも、ポケモンバトル歴でも、雅也の一個先輩である。ちょっと拓馬の表情が曇っているのは、自分の仲間である雅也が負けた所を、不可抗力とはいえ、ついうっかり見てしまったからだろう。

「分かった。今行く……」

　落ち込んだ声で、雅也が頷く。よほど、負けた所を見られたのが悔しかったのか、それとも恥ずかしかったらしい。ちなみに他の二人も、仲間に負けたところを見られると、似たような反応をする。バトルスタイルは全く違うけれども、そういう性格は、長いこと一緒に暮らしているせいか、似てしまうのだろう。

「拓馬、分かっているとは思うが、午後は俺とここで練習試合な」

「はい。分かっています」

　コクンと頷くと、拓馬は居間に向かう。お昼ご飯は、いつもそこで食べるのだ。

「じゃあ、僕達は午後は走り込みでもしよっか。ね、ピチュー」

　ようやく目を覚ましたピチューに、雅也はそう言った。ピチューはコクンと頷く。今日はもう練習は夜までないはずだが、それでも雅也達には、午後をまるまる休みに当てるつもりはないらしい。

「その前に、お昼お昼―っと。今日は何かな？」

　ピチューが目を覚まして、すっかり元気を取り戻した雅也は、鼻歌交じりに格技場を出る。今日言った事が、次の練習試合できちんと反省されていると田島としては嬉しいのだが、この期待はもう何百回と裏切られているので、次で劇的に変わるとも思えないらしく、深く溜息を吐いて、ハッサムと一緒に居間を出た。